

大安寺南大門、中門及び回路の発掘

正会員 大岡 実¹⁾
正会員 村田 治郎²⁾
正会員 福山 敏男³⁾

正会員 浅野 清⁴⁾
正会員 杉山 信三⁵⁾
正会員 鈴木 嘉吉⁶⁾

1. 序言

本発掘は二つの目的を持つて行つた。一は云うまでもなく大安寺の旧規模を明らかにする一端に資するためであるが、今一つは平城京研究の一環として、薬師寺南大門等の発掘と相待つて、京内に於ける確実な二点を定めるにあつた。即ちそれぞれ左京六条四坊並に右京六条二坊にあつて、その伽藍中軸線即ち南大門中心線は左京三坊大路並に右京二坊大路より夫々東一町の小路の中心に当り、両寺の南大門は共に六条大路に面していると考えられるので、南大門の位置を明らかにし、更に念のため中門の位置を明らかにすることによつて、伽藍の中軸線をかなり精密に確定し得られ、六条大路との関係も認定し得ると予想されるからである。

大安寺は早く転退して、旧寺地の四至も不明瞭となり金堂、講堂等の主要堂宇の跡も煙滅し、僅かに七条四坊に立つた東西両塔趾が辛じて略残骸をとどめるのみである。金堂跡と推定される地は今大半が水田とされ、講堂跡は小学校の敷地に入り、僧房跡に当る部分も畠或は水田となつて、今は全く見分けのつかない状態となつており、時々基壇石と考えられる凝灰岩切石や、礎石等が堀出されることから、その形跡が窺われるのみである。現大安寺境内地は近く水田や畠を新に取り入れて拡張整備されたものであるが、両塔の位置から推定して行くと、南大門、中門、南回廊等の敷地に該当すると思われ、更に南回廊の東翼は境内地の東北方に道路を距て、存在する原野、御霊神社の飛地境内に延びていると考えられた。

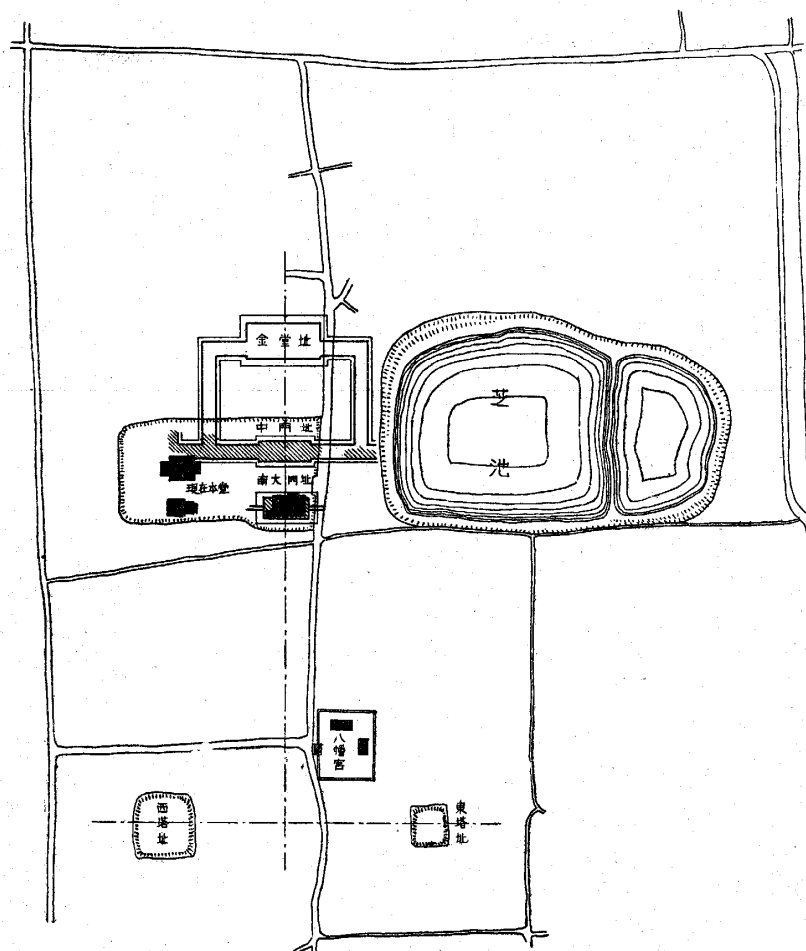
よつて今回の発掘はこの境内地と御霊神社の森並にその間の道路をに亘つて実施し、南大門、中門及び南回廊の規模を究明し、出来れば築地の位置を確認することによつて六条大路との関係を正すこととしたのである。(第1図参照)

本研究は文部省科学研究費の援助によるものであり、発掘は主として浅野清、奈良国立文化財研究所建造物研究室の杉山信三、鈴木嘉吉、同考古学研究室の田中一郎が担当した。尙発掘に当つては東京大学工学部建築学科大学院学生沢村仁、工藤圭章、並に同文学部考古学科大学院学生加藤晋平等の諸君の長期に亘る助力を受けた。又大安寺並に地方の方々の好意ある協力によつて完遂し得たものである。合せて深甚の謝意を表したい。

2. 発掘の経過

発掘は昭和29年7月26日に着手8月29日に完了した。

この発掘の手がかりは先ず去る昭和28年8月末に実施された水道配管工事に際して、大安寺庫裡の東側道路の西よりで発見された凝灰岩布石である。尙昭和の初めの頃当時奈良県技師岸熊吉氏もその



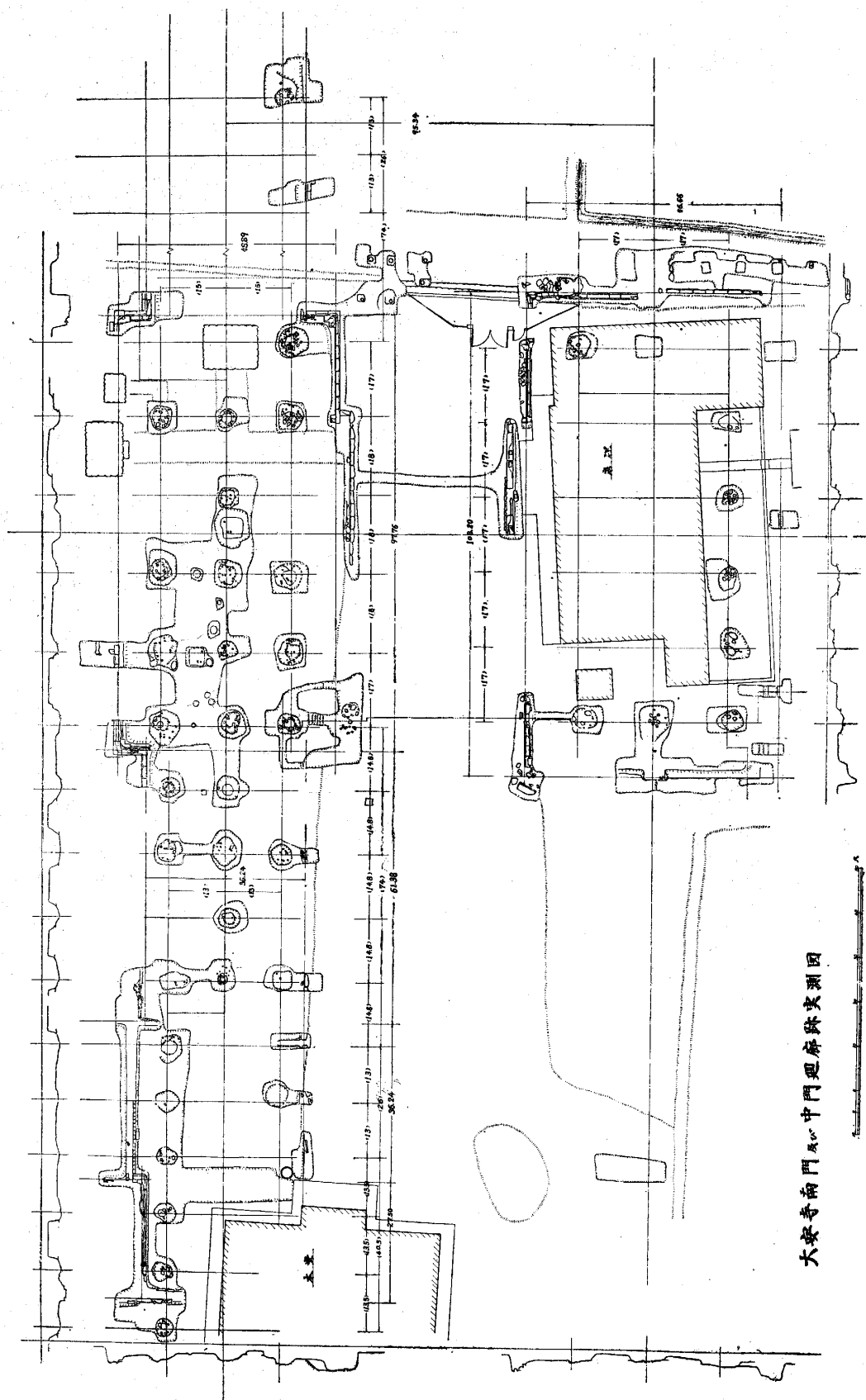
第1図 大安寺附近実測図

1) 横浜大学教授 工博 2) 京都大学教授 工博 3) 東京文化財研究所美術部長 工博 4) 奈良学芸大学教授
5) 奈良国立文化財研究所員 6) 奈良国立文化財研究所員 (本稿受理 昭和29年11月)

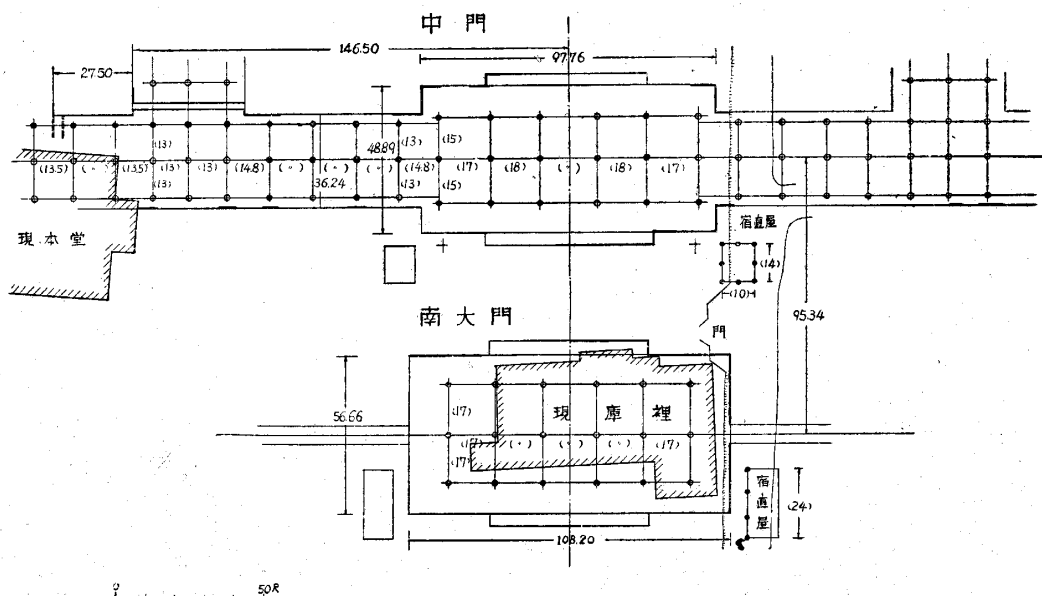
稍北方で凝灰岩地覆石様のものを発見されていると云う。よつて先ずこれらを掘出して見た。(第四図) 南方のものは単なる布石であるが、北方のものには東石や羽目石の仕口らしいものがあつて、基壇の地覆石と判定された。然し両者は一直線上にはなくて、布石が地覆石の丁

度外側に来る関係となつていた。この状態から推すと、この西の少し高くなつてゐる庫裡の敷地が建物跡に当り、その位置からして、南大門であると思われた。次にはこの基壇の北と南の隅を確める順序であつたが、現存地覆石の南端が東柵に終つてゐるので、ここを基

第 2 図



大藏寺南門及び中門跡踏査測図



第3図 大安寺南門、中門及び回廊平面復原図

壇の南東隅と認定すべきか、布石の部分まで基壇が延長していたと見るべきかが岐路となつた。然し都合悪く、その北が寺の門外のコンクリート製階段になつていたので、そこを掘つて簡単に確定出来ない。そこでこの階段の北を試掘してみた所、瓦等が乱積していて、基壇外に当たると見られたので、基壇はこの門の階段の途中で終つていると判断された。然しここを直接掘ると被害が大きいのので別に西方境内地で、南北のトレンチを起して南へ前進し、南大門基壇の北側に到達することとした。

ここを堀割ると、瓦を夥しく含有しており、深く1メートル下つて地山に到達した。従つてここは明らかに基壇外である。南へ進むと一旦瓦の含有量が減少し、更に又増して、遂に庫裡の玄関に接して凝灰岩片の附着した固い土層に逢着した。これは階段の部分に相当するらしい。これで南大門基壇の北辺を知り得たので、次に西辺を知るため、庫裡の西方の畠に東西のトレンチを入れてみると東方では小石交りの固く突きしめた土層が現れ、西方に向うとやがてぼこぼこの土に変じ、その境が基壇の西端と考えられた。嘗てこの畠を作つていた某氏の談によると、この西辺から凝灰岩切石を数十基堀出したと云う。土がぼこぼこになっているのはそのせいであろう。次には壇の南と北の端を確めるために庫裡の西でトレンチを入れてみると、同様土質の変化によつて、土壇の南と北の端をさぐり得たが、南面には基壇石が残されず、北側では突固め土層の終つた外方に凝灰岩片が散乱し、その下から地覆石が現れた。南方は田にされていたと云うから、石はその時無くなつたのであろう。

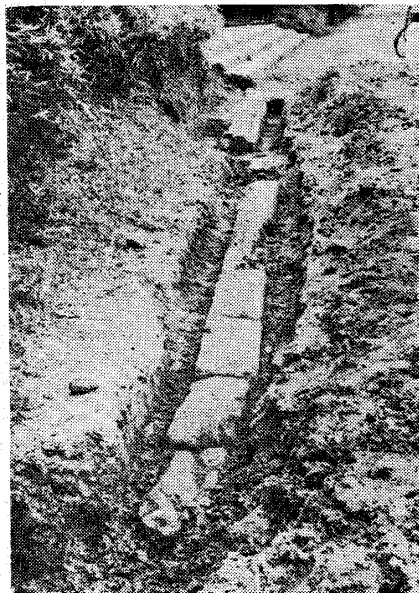
こうして南大門の土壇は略輪廓が判つたので、次には先の南北の大トレンチを北へ延して、中門の土壇に達するべく、これを北へ堀進めた。すると忽ち固い土壇に行

き当たり、既に中門基壇に達していることが判つた。よつてその壇の東端を知るため、東方で南大門東側基壇の延長線上を堀つたが、焼瓦層が続いて壇外と判断された。所でここでは中門から回廊が続く筈であるから、余程南よりで検べないと中門基壇の東端を見失うので、それを注意しつつ、東西のトレンチを入れた。然しこの辺は土が攪乱されていて判明しなかつたが、更に深く掘下げると、トレンチの底から凝灰岩布石が東西に続くのを発見した。これに力を得、これをたどつて進むと、遂に基壇東南隅に達し、そこには布石の内側に隅地覆石が蔵存していたため、非常に明瞭となつた。(第7図)

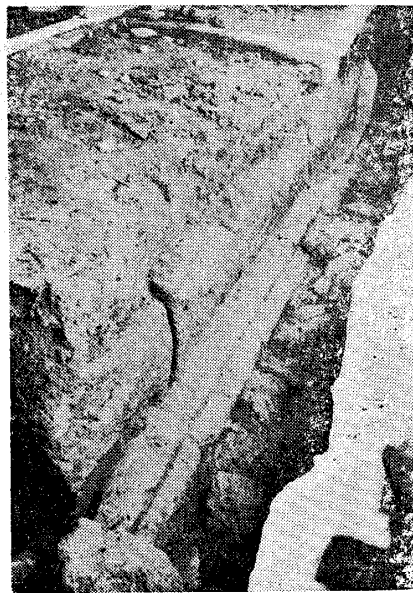
以上で最早方法はつきりして来た。一つはこうして残存する基壇地覆石なり、或はその外方に来る布石なりを堀出すことによつて基壇の外廓を明確にし、かねて基壇壇正積の構造を知ること、それが出来ない場合も土の区別によつて、基壇内の土壇と、その外に当る部分を見別け、基壇の大きさを限定することである。幸にこれらの土壇外の部分が埋立てられて、かなりよく土壇が残されているから、以上の可能性は十分ある筈である。所がこれだけ土壇が上方近くまで残っている様子からすると、現表土をさぐることによつて、礎石の据つていた痕跡、即ち礎石据付けのために掘りくぼめられた穴なり、礎石下にかかれた詰石のようなものが残っているのを見出す可能性がある筈である。幸に中門趾には樹木や一二の石碑の他には障害物もないので、その大半はこれを試堀出来るのであるから、有望である。かくして次にはこれを試みることにし、中門の基壇上中列戸口通柱の西より第二又は第三柱を含むと推定される位置に於て、約12平方の広さにわたり、芝を起し、表土を剥いで、旧土壇のつき固め土の面を露出して、そこに異常な部分が認められないか試みることにした。最初この部分からは一箇

所の異色の土を発見したのみで、それを掘ってみると、
径1.5尺位の円形壺穴となつたが、その他には東南隅に
異常が認められたので、これを掘抜げてみると、かなり
広範囲に瓦片等を混じたぼこぼこの汚い土が展開し、こ
の土を取除くと、底に小石が詰められた格好の穴を生じ
た。(第9図参照)よつてこれより15尺程北方を掘抜

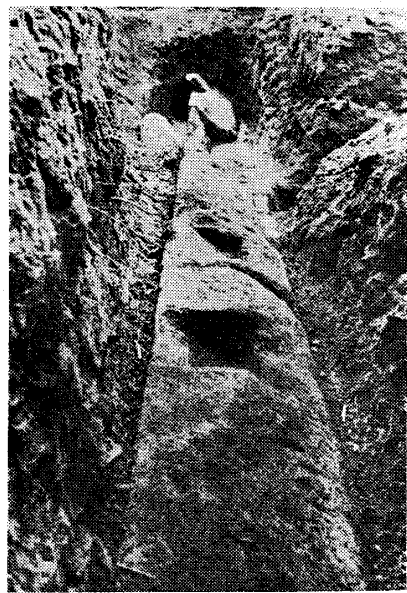
めた所又同様な穴を見出したのであるが、先の小壺掘穴
は梁行15尺間の間に1つ、桁行18尺間に2つ出た。
かくして礎石据付跡を見出す可能性のあることが判つた
のであるが、土壇の築土の中には小砂利が混じ、瓦片等
を含まないので、礎石掘おこし後その跡へつめた土の区
別は比較的容易であつた。



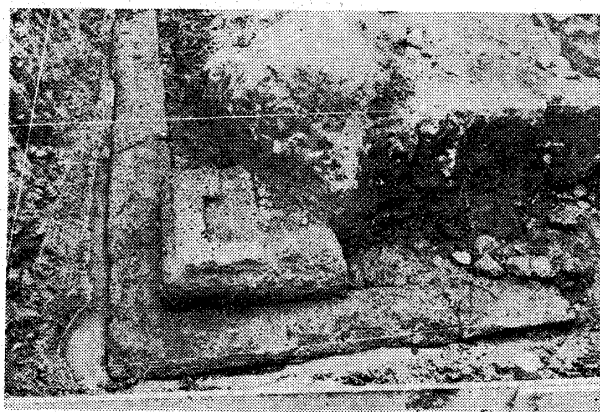
第4図 南大門東側基壇地覆石及
布石



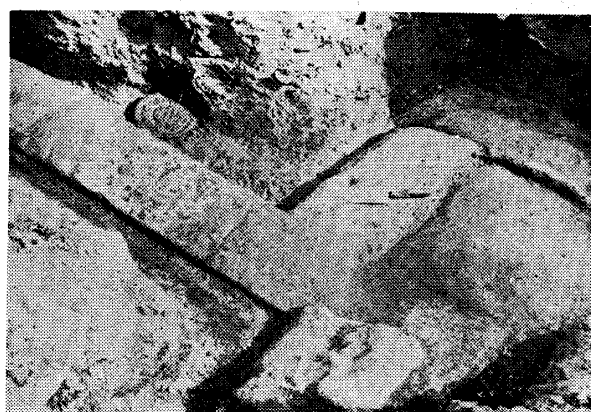
第5図 南大門北側東方基壇残存
状況(東より)



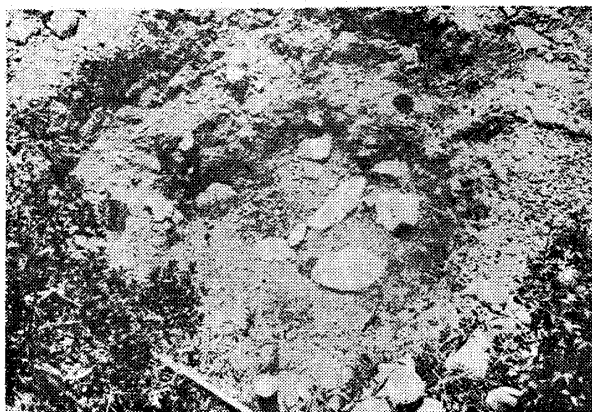
第6図 南大門北側階段最下の踏
石



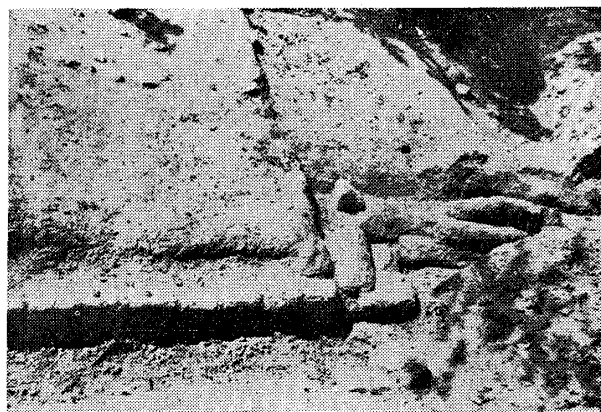
第7図 中門基壇東南隅地覆石及び布石(東より)



第8図 中門南側階段東端附近布石(西北より)



第9図 中門北列東より第2柱礎石据付け跡(西北
より)



第10図 南廻廊西端渡廊東北取付部(北より)

かくして基壇石の方は中門とその東の回廊との取付、中門南側階段外廻りの布石等の要所をおさえたが、中門西南隅では石が出ず、南大門も西北隅を明らかにし得ないので、これらの部を掘った。中門西南隅では遂に石を見出し得ず、南大門北側西端部分では、凝灰岩地覆石を見出したけれども西端隅石は残らず、矢張端を捉え得なかつた。然し南大門北側東方では遂に門の外のコンクリート階段下から、東北隅地覆石を見出し、それから西に続いて、地覆石の上に東石や羽目石が嵌つたままの所すら現れ（第5図）階段の東辺及び北辺も判明し、旧階段の構造もある程度推測し得るに至つた（第6図）。尙南大門の西側と南側では遂に凝灰岩片を見出し得なかつたが、土壇の端は略これを確めることが出来た。中門では北側で、東西に於ける回廊との取付部、階段の西端を示す地覆乃至布石の存在を確め得たのである。礎石跡の方は中門では樹木や石碑等の障害物のため不能だつた5個を残してこれを究明、桁行5間梁間2間であることを知つた。南大門では表土の削られた量が多かつたらしく、礎石底の詰石の一部しか残存せず、その上庫裡の下になつて調査を思うにまかせぬ部分が多いため、東列で1箇所西列で3箇所、南列で5箇所を確め得たにすぎなかつたが、これによつて要所はおさえることが出来、桁行5間梁間2間の建物であることも判明した。

回廊に関しては中門東方は道路や森に入っているのと同西方のものについて究明することとした。先ずこれを複廊と見て中門中通柱筋の西方への延長上で礎石据付跡を求め、これが得られた後南北列の据付跡を探し、（資財帳記載の広26尺がこの時役立つた。）これにそうて南側の基壇石を所々で探した。然し回廊西南の曲り角の部分はこれを明瞭にしておく必要あり、その部の礎石据付位置を明確にすることによつて、柱間寸尺の正確な割付を考えねばならない。障害物の関係上北列柱の西端3本の礎石据付跡を明瞭に出すこととしその附近一帯の芝をけずり、表土をはいで、これに備えた。所がその際北折して西回廊の続く地点から凝灰岩を立てた溝様のものが発見されその西に凝灰岩基壇の一部が現



第11図 南大門東側で出た掘立柱穴跡

れたのであるが（第10図）不思議なことには、この回廊西辺に相当する筈の基壇が南へ続かないで、西へ曲り、南回廊はそのまま西へ続く形勢となつたのである。溝に就いては回廊内廊の水を外方へ導くためのものと解し得られるが、回廊が更に西に延びるとすれば、西方の別な建物への渡廊なのか、単なる張出しなのか確める必要が生じた。よつて更に北側柱列とこれにそう基壇石について、これを西方にたどつた所（南方は本堂の下になつて調査不能）同じ柱間が3間続き、4本目の柱礎石下根石の手前で南北の基壇石が現れた。この基壇石は一部細長い花崗岩自然石、一部凝灰岩であつたが、凝灰岩のみを取れば、渡廊の如きものが終つて、南北に延びる別の建物に達したものと解された。花崗岩自然石の方は後に挿入されたものであるかも知れない。

中門より東の回廊は樹木も多くて徹底的発掘は困難なので、南側柱列に於て西回廊の寸尺を折返しにした地点と、その少し手前と2箇所を試掘してみた所、手前の位置では基壇南側に当る凝灰岩の布石を、東端では土壇と隅礎石下根石を見出し得た。そしてこれによると回廊土壇は更に東方に続いて、西方同様別な建物への渡廊の如きものの存在する可能性が認められた。但しこの先には巨木があり、更に貯水池の堤になつていて発掘不可能であつた。

最後に残されたものは南大門両脇の築地跡である。所で南大門の西側は掘荒されていて調査不能に近いのに反し、東側は道路になつていて、却つてよく残つていようと思われたので、市当局の諒解の下に、これを掘つてみた所、果して築地下の石積と思われるものが現れ（南側のもの、北側のものは失われ、唯その部が一旦掘られていて石を据えつけられた跡らしく判断された。）これによつて、築地は南大門の側面中央に取付いていたことが判つた。そしてこの部分では凝灰岩基壇も築地巾だけ切れて存在しなかつたものと見られた。尙ここで築地外の地表がどう取扱われていたかを確めるため、掘つてみると、地山の中に2尺弱角大の穴が出来、これが南北に4箇所各8尺間隔に出現した。（第11図）この穴の輪廓のはつきり出し切れないものもあつたが（地山が砂利で判別困難）中に小円形のやわらかい部分あり、柱の腐朽した跡と推定することが出来たものもあつた。この東方や南方は水田になつていて調査不能乍ら、この24尺は南大門宿直屋（資財帳）の長さに該当することは注意を要する。これと対称の西方は田畠になつて攪拌されているので試掘しなかつた。このことからすると中門脇には尙中門宿直屋が存在するかも知れないので、次にはその部を掘つた所、同様の穴が出現し、その中に柱の存在した跡らしい小さい円形が現れた。そしてこれは相等並びは悪いが梁行に10尺、桁行に14尺各2間と推定することも可能で、矢張中門宿直室と考えてよさそうであつた。これと

対称の地点は作業に手間を要するので、今回は調査を割愛した。

其他南大門西側中央を検してみた所、ここは築地が突出していたらしい形跡が築き固められた土によつてたどられた。又中門西基壇端の西方約 90 尺程の地点で、回廊の延長線上と見られる箇所南北のトレンチを入れて見たが、地山が著しく深く下り、遂に何等の遺蹟の存在も認められず、何の解答も得られなかつた。以上の他徹底的に調査することが出来ずに了つたのは、南大門中門間に入れたトレンチの途中に掘立柱穴かとも見られるものの見出されたことと、中門南側西端の柱位置の南々東約 14 尺の地点に礎石下根石と似た小石群が存在していたこと等であつた。

3. 遺跡に関する考察

平面の規模

先ず各建物の柱間寸尺を算出する必要があるが、礎石そのものは一つも残らず、僅かにそのぬき取られた跡なり、その底におかれた詰石の一部を残す程度であるからこれを決定するには、能う限り多くの据付跡を掘出し、基壇石の通りを参酌して、出来るだけ精密な軸線を出し無理のない判定を下す他はない。その他次のような仮定の下にこれを定めることとした。それは奈良時代の建築の柱間寸尺は、従来知られているものによつても、又資財帳等に記された例から推しても、特殊な場合を除き整数尺となつていたので、ここでも整数尺を用いたと考え次のようにしてこれを測定した。先ず一番よく残つていた南大門東側、同北側、中門南側等の基壇石によつて軸線の方位を定めた。(これらは大体平行し、又直行していた。)南大門及び中門を連ねる中軸線を定めるには次の如くした。中門北側の基壇両端が出ており、南大門北側でも西端隅地覆石を欠くのみであるから、同東端の西隣に存する東の中心から、東端までの距離を西端の東隣の東納の中心から西へ取つて、先ず基壇西北隅位置を推定し、これらによつて決定した。幸に中門の中軸線は南大門北側階段中央耳石の中心と一致したので、自信を持ち得た。次にこれと直角の東西軸線を定めるには、中門では南北側の基壇石から出し、南大門では、東側北方の地覆石南端と南方の布石北端との間の隙間を築地の巾と推定し、これによつてその軸線を定める拠所としたが、礎石据付跡や南側土壇の納りが悪いのでこれより約 5 寸南方に中軸線を定めてみた。所がこの線は両側に残された築地の痕跡に対しては、反対に 5 寸程北へより過ぎてゐる。以上のようにして設定した軸線を遺形によつて遺跡の上にプロットし、次に柱間寸尺を推定して、これを一々遺跡上にプロットして、その正しさを吟味したのである。所がそのためには一応尺度の復原を必要とするが、ここで基壇の実測値から精密な尺の復原をすることの出来る程の資料も得られないので、一応、98 と云う換算値

を取つておいた。その結果は、次のような数値と考えるのが一番妥当と考えられるに至つた。

南大門	桁行 5 間各間 17 尺	梁行 2 間各間 17 尺
中門	桁行中央 3 間 18 尺	両端間 17 尺 梁行 2 間各間 15 尺
回廊	桁行中門妻柱心から隅曲り部分内側柱心まで 5 間各 14.8 尺	
	梁行 2 間各 13 尺、隅曲り部分桁行も同様、その外方の渡廊桁行 3 間各 13.5 尺	

この中、回廊の桁行寸尺は如何にしても整数値とはならないので、この寸尺の決定は困難であつた。14.75 尺と推定することも可能で、相手が礎石下の詰石のこととて、一柱間につき 5 分程度の差は適不適の決定的判断を左右しない。然し、それ以上距つた寸尺を仮定することは無理である。14.8 尺と考えたのは、5 間分の総和が 74 尺と云う整数値になるのみでなく、隅の間の 26 尺を加えると 100 尺と云う完数となるし、このように仮定すると西端に於ける柱心から基壇外面までの出が、南側の実測値に一致して好都合だからである。

基壇の大きさは、全長の判明するものはそれにより、一方の欠けたものについては、以上の如くして定め、中軸線で折返して算出した結果によれば(地覆石外面間)

南大門 東西	108.20 尺	南北 56.66 尺
中 門 東西	97.76 尺	南北 48.89 尺
回 廊 南北幅	36.24 尺	
南大門、中門間心々	95.34 尺	

階段の巾は、中軸から一方の端まで

南大門北側 26.20 尺 中門南側 26.50 尺 同北側 26.20 尺以上何れも現在の尺による寸尺である。階段の巾は南大門では、略耳石の中心と端より一本内の柱心と一致するが、中門の階段の巾は南大門のと略一致していて、同柱心は階段の外面位と一致する関係となる。尚基壇地覆外には見付巾約 1 尺の布石が廻つてゐるので、雨はその外に落ちると考えると、軒出の下限が出る。それを算出すると、

南大門	平で 12.67 尺	妻で 13.45 尺
中 門	10.745 尺	6.76 尺
回 廊	5.38 尺	5.38 尺

これは軒出の下限を示すのみであるが、これよりして、南大門は隅の柱間が桁行梁行一致することと合わせて入母屋造、中門はそれが一致しないことと合わせて切妻造と推定されるし、中門は斗拱に手先が無かつたとも考えることも出来るが、南大門は相当手先を持つた建物と見る方が妥当に思われる。回廊には手先のない可能性が大きい。

旧地表(壇外の)は現地表の最高点から約 5 尺下に当るが、堆土を除いた土壇の表面は旧地表より、南大門で 3.5 尺、中門で 4.0 尺程ある。但し南大門では旧土壇表

がかなり削られているので、実際の壇は中門より高かったと見られる。確実に葛石と見られるものは一基も見出されていないし、現存羽目石や束も頂を欠き（最高のものの地覆上面から 2.2 尺）階段耳石も存しないので、壇の高さを完全に復原することは不可能である。但し階段最下踏石位置の実測値から推して階段石が 4 級、葛石と合わせて 5 級とし、最下踏石の高さの 1 尺が繰返されたとすると、5 尺となるが、それを超えることはあるまい。布石は欠けていたが、布石があれば、それはこの外をまわることとなる。

基壇の構造は地覆石の上は束羽目石の前面の引掛るよう後部を切欠かれており、前面に欠取りがあつて断面凸字型となり、羽目石、束共に前方部は地覆石の天に載ることとなる。束石の側面も同様後部を欠取つて羽目石が前方へ追出されないようにされている。束間隔は南大門東側北半が二分される程度の割付。束見付巾 1.50 尺（階段際の入隅のものは 1.18 尺）東面の羽目石面よりの出は 4 寸、束と地覆の座は 1 寸、地覆前上角の切欠きは高さ 2 寸、深さ 3 寸見当。羽目石や束の厚は 8 寸、羽目石巾 3 尺程度。地覆石の高さは 1 尺弱、巾は 1.4 尺内外、この地覆石の外方に布石がまわるのであるが、布石の巾は 1.1 尺見当。この上に地覆がのるので、その見付巾は 1.0 尺位となる、高は 7 寸弱。階段の出は南大門の北側で 4.3 尺位、初級の石の大きさは巾 1.43 尺、高、97 尺で、これに段の両端や中途に来る登り石の柄が見られる（第 6 図）。所でここに注意を要するのはこの登り石の巾で、両端及び柱通りに来ているものの見付巾は、現存する登石の断片や、最下段石の前上角の減り方等から推して 2.4 尺と推定されるのに対し、柱間に今一つの登り石柄が二つならんで存在し、これよりすると、2.4 尺巾の石が二つ並んでいたこととなり、その巾は実に 4.8 尺となることである。これは或は支那建築に見られるように、彫刻等を施されたものではなかろうか。中門の階段の出は南大門より 1 尺程狭く、従つてその基壇面も 1 尺位低かつたであろう。

尚隅の地覆石や、その外方に来る布石は巨大な一石から製られ、その大きさは 3 尺に 2.5 尺見当に達し、羽目石等と大じ位の大きさになつてくる。

回廊の地覆石と見られるものは要所で出たが、その羽目石に当るものは南回廊西端から西方へ突出する部分の北側で出た。束石を欠き羽目石のみ存在する。尚ここでは地覆石の外には布石がまわる。

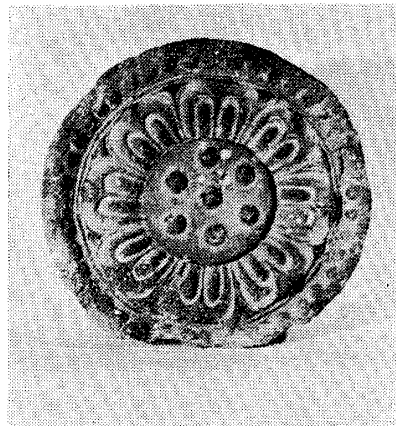
水抜の構造は、両岸に巾 5 寸高 1 尺程の凝灰岩切石を立て、その上に石蓋を施したものらしく、一部に蓋の端の框の残片が残されていた。溝内法巾は 1 尺位と推定される。

宿直屋と推定される掘立柱の構造は従来法隆寺東院、平城宮趾（昭和 29 年 1 月発掘）、奈良高等学校校庭の遺

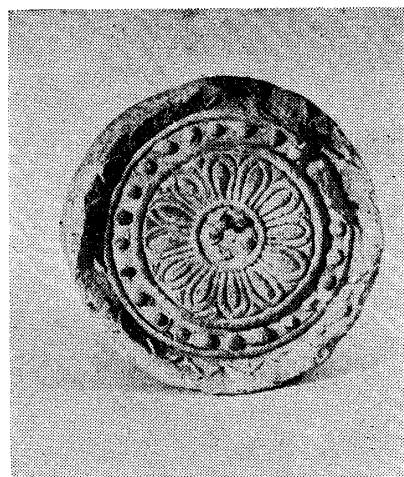
跡等で発見せられたものよりは余程小規模で、柱間隔も狭いが、恐らく比較的細い柱で、簡単な構造のものであつたと思われる。

4. 出土遺物に就いて

出土品の主なものは瓦で、その他土器（殆んど土師器須恵器は極く少い。）磁器断片、鏡、古銭、硝子玉等であるが、旧地表（壇外）上に埋立てられた厚 5 寸程の土中に多量の土器碎片を含むことは注意を要する点であつた。



第 12 図 中門南階段東端附近出土土門瓦当

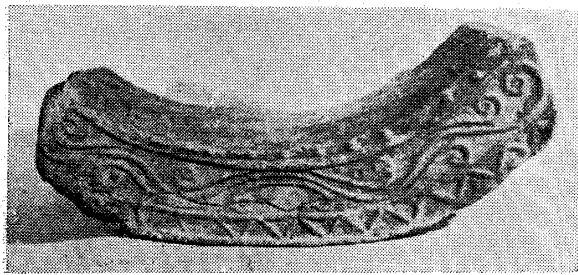


第 13 図 中門東南隅附近出土土門瓦当（その 1）



第 14 図 中門東南隅附近出土土門瓦当（その 2）

た。瓦の出土状況は、中門に於ける基壇附近の旧地表上に見出されたものと、その上に埋められた土器包含層上に見出されたものの他は埋立土に混入したものである。前者は焼損の形跡をとどめ、建物が焼失した際落下堆積したものと見られる。尙礎石掘起し後埋立てられた部分からは室町時代と推定される瓦が多く出ている。尙出土瓦には奈良平安室町時代のものが多く、中間の鎌倉時代頃に擬し得るのは比較的少い。古銭も熙寧元宝一個の他は寛永通宝のみで古いものは出ていない。尙瓦については、地覆石の外方を広く掘掘めれば尙多く出土する可能性がある。然し今回は掘方を地覆石外の布石を出す程度に



第15図 中門東南隅附近出土平瓦当（その1）



第16図 中門東南隅附近出土平瓦当（その2）

とどめたので、出土瓦の数のみによつて、使用されていた主要瓦を判定することは危険であろう。

以下文様瓦について多少考察を加えておこう。

先ず文様瓦の種類は円瓦 21 種、平瓦 22 種、5 個以上出土のものを円瓦で 2 種、平瓦で 7 種あり、平瓦に 70 個同一種類のものを出しているのがあることは注意を要する。（第 16 図 この瓦は至る所で出土している。）そしてこれらの内、平瓦の一種を除き、何れも平安時代に下るものであることも看過出来ない。出土地が落下したままの位置と見られるものは 4 種あり、（第 12 図乃至第 15 図）この中第 12 図のものは土器包含層の下から出たもので、創建当初のものと考えられる。（他にこれに類似の瓦 1 個、これに匹敵するような文様の平瓦が 1 種出ている。）他の三種は土器包含層土から出土しており、平安時代に属する瓦と見られ、二次的のものと考えられる。

5. 遺構及び遺物に対する史的考察

基壇石等の遺構に関して考察する限り、後世修補改造の痕跡は殆ど見出し難い。強いて挙げるならば、南回廊西端突出部とその西の建物との境に挿入された花崗岩自然石の延石位である。又中門南側基壇附近に於ける瓦の堆積状況からみると、旧地表上に 1 回、その上に一旦土器を多量に含んだ土を埋立てた上、その上に一回自然落下したことが察し得られるので、少くも中門の火災による焼失を 2 回と見てよさそうである。南大門附近では瓦が片付けられたのか、そうした明瞭な状況は見出されず専ら埋土に混じた瓦片を採集し得たのみであつた。

大安寺南大門、中門等の焼亡及び再建の記録をたどると、

寛仁元年（1017）三月一日夜焼亡、塔婆及び釈迦像一

体難を免れる。（紀略、略記、百鍊抄、僧綱補任）

長久二年（1041）九月十三日焼亡（符宣抄、略記）

寛治四年（1090）十二月末頃迄に金堂、中門、回廊、

七重塔等を修造（東山御文庫記録）

寛治八年（1094）五月講堂、南大門の修造を行うため
近江国野州庄、淵庄の不輸入権を宣旨する（同前）

以上の記録によると、中門は少くも 1 回再建されているので、再建前と再建後と 2 回の焼失を考えることは可能である。再建後の焼失の記録が見当たらないので、その時を明らかにし得ないが、保延六年に南都を巡礼した大江親通が七大寺巡礼私記に記す所によると、当時大安寺には金堂、四面歩廊、講堂及び東塔の存在したことが知られる。中門は歩廊と離して考え難いので、当時尙存在し、その後転退したのであろう。基壇外に堆積した瓦を余り掘出していないので決定的なことは云われぬが、ここから鎌倉時代に下る文様瓦は今迄の所見当っていないので、その後程なく失われたのであろうか。

礎石を抜取つた跡へ埋めた土中からは室町時代の瓦が多く出土することからすると、その頃尙建物が建てられたか、修補されたことを知り得るが、礎石の抜取られたのはそれ以後のことであつたのである。

6. 結 び

この調査の結果、大安寺南大門、中門及び南回廊の位置及び規模が明らかにされた。規模については、大安寺流記資財帳の記載によつて回廊の広さが 26 尺であることが判り、同帳に金堂の長さ、その東西の回廊の長さを記しているの、北回廊両端間の寸尺を推知し得る程度に止つていたが、（この長さは 286 尺、今回推した南回廊両端間の長さは 288 尺。この差は仕事の斑によるか、.98 と云う換算値の誤差によるかは決定し難い。）今回の発掘によつて上記の成果を得ることが出来、規模の明らかにされているものの少い南大門及び中門に確実な 1 例を加え得たのである。尙特記すべきは、南回廊両端の折点から東西へ渡廊の如きものが延びて、その先の別な建物に連ることが知られたことである。この先の建物の性質を究めるのは今後の課題であるが、その柱心から基壇外面までの寸尺が短い（約 7 尺）ことから推して、恐らくは手先のある斗拱を持つような建物でないことを推知し得る。

次に未だ一列の柱列を見出したのみで発掘未完了ではあるが、南大門外に見出された掘立柱遺構はその長さ 24 尺あり、中門脇で発見された掘立柱遺構は桁行 14 尺、梁間 10 尺と認定され、資財帳にある合宿直屋六口の内二口南大門東西曲屋長各二丈四尺、広一丈、高七尺五寸、葺瓦、二口南中門東西長各一丈四尺、広一丈、高八尺

とあるものに該当すると見られる。（何れも東脇のものを掘つたのみで、西脇のものを掘るには至らなかつた。）かねてこのことは、今回発掘した南方の門が南大門で、北方の門が南中門であることを示す。尙資財帳中には別に中門の各称も見られるが、これは南中門の別称であるか

も知れない。

六条大路との関係については、築地が南大門妻中央に取付くこと、宿直屋が築地の外に立つことが知られたのみで、築地が興福寺の場合のように南大門から少し離れて南方に折れ、更に東西に折れ、その外方が六条大路になるのであるか、或はかまわず築地の外へ南大門が飛出すのか、何れとも決し難く、これだけの資料では解決されないことが判つた。

最後にこの発掘によつて、大安寺伽藍の中軸線が明瞭となり、旧地表や遺構の残存状態も明らかとなつたので、今後に於ける大安寺伽藍の発掘に大きい指針を与えたこ

とを附記したい。金堂は現在その大半が水田に切落されて、遺構も多く失われているが、尙その北及び東端一部は宅地や道路にかかつて、発掘究明の可能性あり、講堂、僧房等についてもかなり稔多い発掘結果を期待し得ると見られるに至つたことは重要である。(講堂の大半は小学校の校庭にかかり、僧房の中東方のものは水田に切落されているが、今尙溝底に凝灰岩布石が残っている程であり、西方のものは畠中になつていたので、相当な結果が期待される。因みにこの西方の畠からは明治以後に相当数量の凝灰岩切石等を掘出しているとのことである。)